土佐日記　帰京

①京に入り立ち て うれし。（入り込んで／嬉しい）

②家に至り て、門に入るに、月明けれ ば、いと よく ありさま 見ゆ。（着い／が／明るい／ので／とても／家の様子／が／見える）

③聞き し よりも まして、言ふかひなく ぞ こぼれ破れ たる。（噂に聞いていた／の／増し／どうしようもないほど／壊れいたんでいる）

④家に預けたり つる人の心も、荒れ たる なり けり。（家だけでなく／を／ていた／てしまった／のである／なぁ）

⑤「中垣こそ あれ、一つ家のやうなれ ば、（隔ての／は／あるのだが／の／ようである／ので）

望み て 預かれ る なり。」（頼みもしないのにその人が望んで預かったのである）

⑥「さるは、たより ごとに、もの も 絶え ず 得 させ たり。」（そうは言っても／ついでのある／お礼の贈り物／途絶えないで／送って／いた）

接

⑦「今宵、かかる こと。」と、声高に もの も 言は せ ず。（今夜／帰ってみると／こんな／ありさまだ！／人々は不満を言うが、／言わ／ない）

形動

⑧いと は つらく 思われる ど、こころざしはせ む と 思う す。（とても／薄情に／が／お礼／し／よう）

⑨さて、池めい て くぼまり、水つけ る所あり。ほとりに松もあり き。（池みたいになっ／が／たまっていた／が／ある／た）

⑩五年六年のうちに、千年や過ぎ に けむ、（が／たのだろう／か）

かたへ は なくなり に けり。（松の半分／なくなっ／てしまっ／たなぁ）

詠嘆

⑪今 生ひ たる ぞ 混じれ る。（新しく生え／たの／が／混じっている）

⑫おほかた の、みな荒れ に たれ ば、「あはれ。」とぞ人々言ふ。（松のだいたい／が／てしまっている／ので／ああ、ひどい／は／言う）

感嘆詞

⑬ 思ひ出で ぬことなく、思ひ恋しき が うち に、
（思い出さ・ない・が・恋しく思う・中・で）

この 家にて 生まれ し女子の、もろともに 帰らね ば、
（で・た・が・いっしょに・ない・ので）

いかが は 悲しき。
（どんなに・かなしい・ことか）

⑭ 船人 もみな、子たかり て ののしる。
（同じ船でいっしょに帰京した人・みんな・が・よってたかって・騒ぐ）

⑮ かかる うち に、なほ 悲しきに堪へ ず して、
（こんな・情景の・中・で・やはり・悲しいの・耐えられ・ない・で）

ひそかに心知れ る人と言へ り ける歌、
（そっと・が・通じ合っ・ている・読み交わし・たという・伝聞過去）

⑯ 生まれ しも 帰らぬ ものを
（この家で・た・子・土佐で亡くなって・ない・というのに・逆接接助）

わ が 宿に小松のあるを見るが悲しさ
（私の・家・の・悲しいことだ）

⑰ とぞ 言へ る。なほ 飽かず やあら む、またかく なむ、
（詠ん・だ・それでもやはり・言い足り・ない・ので・あろ・う・か・このように・歌を詠んだ）

⑱ 見 し 人の松の千年に 見 ましか ば
（亡くなった女の子・が・もし・ように・の命を持って・いた・なら）

遠く悲しき別れ せ まし や
（の土佐国で・悲しい・を・し・ただろう・か・いや、しないだろうに）

⑲ 忘れがたく、くちをしきこと多かれ ど、え 尽くさ ず。
（残念な・が・多い・けれど・書き・尽くす・ない・ことができ）

⑳ とまれかうまれ、とく 破り て む。
（何はともかく・早く・絶対・破り捨て・よう）